

令和6年度秋田県総合政策審議会第1回未来創造・地域社会部会（議事要旨）

1 日時 令和6年5月23日（木） 15：35～17：05

2 場所 正庁

3 出席者（敬称略）

【未来創造・地域社会部会委員】

石井 宏典（株式会社 141&Co. 代表取締役）

石田万梨奈（onozucolor 代表）

後藤 節子（特定非営利活動法人あきた子どもネット 代表理事）

【県】

仲村 陽子（あきた未来創造部次長）

傳農 満（あきた未来創造部次長）ほか関係課室長等

4 あいさつ（仲村あきた未来創造部次長）

当部会は、新秋田元気創造プランの戦略4「未来創造・地域社会戦略」について、委員の皆様の専門的な立場から議論をしていただく場である。

戦略4は、県政の最重要課題である人口減少問題に関して、自然減や社会減の抑制に向けて取り組むほか、県民誰もが、生き生きと暮らせる持続可能な社会づくりを行うものである。

今年度は、特に女性・若者の県内定着・回帰に重点的に取り組むとともに、脱炭素化、デジタル・ガバメントなど時代の流れに対応した社会づくりを進めている。

委員の皆様には、新プランの着実な推進と実現のため、施策の効果的な進め方、来年度の事業展開の方向性などについて御助言をいただきたい。

限られた時間ではあるが、それぞれの経験や知見に基づき忌憚のない御意見をいただきたい。

5 委員の紹介

6 事務局紹介

7 部会長の選出及び部会長代理の指名

委員の互選により、石田万梨奈委員が部会長に選出された。

石田部会長より、後藤節子委員が部会長代理に指名された。

8 議事

(1) 今年度の未来創造・地域社会部会の進め方について

□田口あきた未来戦略課長

部会のスケジュール等について、部会資料－１により説明

●石田部会長

ただいまの説明について、質問、意見はあるか。

特にないようなので、説明どおりの進め方にする。

(2) 「新秋田元気創造プラン」戦略４の取組について

□田口あきた未来戦略課長

部会資料－２及び３の構成について説明

□杉田移住・定住促進課長

戦略４目指す姿１の主要な事業について、部会資料－３により説明

□糯田次世代・女性活躍支援課長

戦略４目指す姿２及び３の主要な事業について、部会資料－３により説明

□田口あきた未来戦略課長

戦略４目指す姿４の主要な事業について、部会資料－３により説明

□野村温暖化対策課長

戦略４目指す姿５の主要な事業について、部会資料－３により説明

□長岐デジタル政策推進課長

戦略４目指す姿６の主要な事業について、部会資料－３により説明

●石田部会長

ただいまの説明について、意見交換を行う。

はじめに、目指す姿１について御意見を伺いたい。

第１回目のため、自己紹介もお願いする。

○石井委員

当社は２０１９年に創業し、秋田市をベースに起業支援、大学生の就活支援、企業の採用力を上げるための人事コンサル等を行っている。人口減少問題に対して起

業・県内就職からアプローチし、秋田県・秋田市と連携して特に大学生を対象に事業展開している。

大学生が県内企業を知り、就職する流れをつくるような事業にここ3年ほど取り組んでいる。大学生の情報へのアクセス方法は、コロナ禍を機に大きく変わったと感じている。これまでは大学構内で開催される就職イベントに参加する学生が一定数おり、キャリア開発室の担当者もそこで学生と接点を持っていた。しかし、コロナ禍になり、イベントを開催しても学生が集まらなくなった。これは、就活のオンライン化が進んだことが原因で、2010年頃は東京の企業の情報を知りたければ東京に行かなければならなかったが、今はスマホのアプリに登録すれば情報が流れてくる。気になる企業があればすぐに説明会の動画を見たり、Zoom等で面接を受けたりできるため、県外企業に就活するハードルが下がった。

これまで県外に足を運ぶのは大変だから県内企業の就活に参加していた学生たちが、県外に流れてしまっている。県内企業で働きたい、就活したいという動機づけが減り、県内で就活する学生は明らかに減ったと感じている。

そうした中で、どこに働きかけるべきかという、就活が本格的に始まる前の大学1年生、2年生のうちに、どれだけ県内企業と接点を持ち関係を築けるかが重要である。インターンシップや、もっとカジュアルな県内企業の経営者との飲み会に参加することで、企業をよく知り、どういう働きがい、やりがいを持った人生設計ができるかというイメージがクリアにわいてくるようになることが重要だと思っている。

もう一つ、大学生に対する情報発信の手段について、私たちは、イベントに大学生を集客するために口コミをよく利用している。友達に紹介されたから参加するという大学生が多くなっている。他人のコメントやおすすめを気にするのがZ世代の特徴の一つであるため、友達から勧められて参加してみるというのは、一歩踏み出す大きなきっかけになっている。当社では、インターンシップの大学生を長期プロジェクトにアサインし、大学生を使った集客をメインにして成功しているため、口コミによる拡散が学生には有効だと思う。

○後藤委員

当法人は、秋田県児童会館の指定管理者の指定を受けており、現在17年目。また、子ども食堂を運営しており、コロナ禍前は子どもたちと調理もしていた。アルバイトとして高校生や大学生が参加している。

県外出身の大学生は、秋田に残りたくても就職先がないため新潟や仙台に行く。また、県内で教師になった人は、数年後に辞めて東京に行ったり別の事業を始めたりのしている。

若者同士は、オンラインで、例えば羽後町にはアニメの聖地があって、そのよう

な私たちが知らない秋田の魅力を見つけたり、子ども食堂のようにきりたんぽなど郷土料理を作ることが楽しいということにつながっている。高校生 YouTube でどういふ動画を見るのか聞いたら、嫁姑問題を見るのが楽しいそうで、私たちの想像と異なるところで自分の将来を間接体験しているように感じる。

SNSや趣味などで秋田ならではの魅力を出せれば、オンラインだけではなくオフ会もしたりして若者同士のつながりができ、秋田に引き留めるカギになるのではないか。

●石田部会長

新秋田元気創造プランの概ね 10 年後の姿に「個性が尊重され一人ひとりが躍動する姿」とあるが、当団体ではまさにそれが大事だと思っており、そのために何ができるかというところで活動している。だれもが生き生きと働ける職場環境づくりのための組織開発や管理職向け研修、コーチング型マネジメント研修などをしており、県とも若者に魅力的な職場づくりなどの事業を一緒に行っている。また、特にキャリアにおいて、一人ひとりが何をどうしたいのか、自分軸を発見しビジョンを持って人生を作っていくための支援もしている。

石井委員に質問だが、大学生は企業のどういうところに魅力を感じ、就職したいと思うのか。

○石井委員

統計では社会的意義や自分がやりたいことをできるかという理由が上位であるが、やはり最低限、給料が高くなければ選ばれない。そして、福利厚生も重視されている。給料と福利厚生については、県内企業と県外企業とで明らかに格差があり、そこで勝負しても県内企業は選ばれない。

その中で、県内企業を選ぶ理由は、一つは本当にやりがいがあること。自分の夢がこの企業であれば実現できるという前向きな理由は、国際教養大学生にもある。例えば、花火を海外展開したいからこの会社に就職するなど。もう一つは、第一志望、第二志望、第三志望がかなわなかったから県内で就職するしかないというネガティブな理由。大学生については後者が多いと感じる。

●石田部会長

賃金や福利厚生がある程度の水準を超えた企業で、更にやりがいを持ってそうだと大学生が感じて、インターンシップなどで関係性を育むことで安心感が得られたり、その企業について理解する時間を持てれば、ポジティブな理由での就職が増えていくと理解した。

次に、目指す姿 2 について意見を伺いたい。

○後藤委員

当法人では、育児中、親が病院やマッサージに行く間、子どもを預かるサービスを提供している。マッサージは千円で受けられる割引もしている。このようなサービスはあるようでなかったと喜んでもらえた。女性だけでなく男性も利用している。

やはり男性でも女性でも子どもをずっと抱いていると疲れてしまう。どこかでリラックスしたり、子育てについて話したくても、特に男性はどこに行けばそういう仲間がいるか分からない。児童会館では2階の木育ルームに常にスタッフがいるが、このように困ったときの相談や疑問をまめにキャッチしてくれる施設や人がいると、また子育てを頑張ろうという意欲が湧くのではないか。

例えば「ネウボラ」（相談の場という意味のフィンランド語。）だが、ニュージーランドでは、妊娠前から小学校卒業まで伴走支援してくれる助産師や保育士を自分の気質等に合わせて自ら選ぶことができる制度があり、そういう安心感を得られることが大事だと思うので、日本でも広まればいいと思う。

○石井委員

私も育児中だが、妻が育休中のため任せっきりになっている。これが共働きになったとき、男性も平等に公平に家事・育児に参画しなければならないだろうとは思っているが、その普及・啓発イベントには自分はおそらく参加しない。県が普及・啓発に取り組む場合、基本的にイベントやセミナーを開催するが、参加するのはもともと意識が高い人。情報入手手段が限られている場合は必要かもしれないが、今は情報があふれている時代なので、アンテナが高い人は自ら学んで行動するだろう。

家事・育児参画は夫婦間の問題なので、行政が男性の参画を推進することについて個人的には疑問視している。何が課題なのか。やはり男性が家事・育児をしないため女性が大変な思いをしているという現状があるのか。

○後藤委員

そのような現状がある。

夫に子どもを預けるのが心配だという女性も多い。誤って異物を口にしないかなど、そこまで注意を払えるのかという心配。育児の面で夫を信用していない女性は意外と多い。一方で、平日働いていても土日は子どもの面倒を見てくれる男性もいて、それはやはり女性は助かる。

児童会館では、土日の利用者の約8割が男性。子どもを二人連れて一人おぶって来る人もいる。男性にも困ったときに話せる場づくりが大事だと思う。

○石井委員

後藤委員が述べた伴走型支援はとてもよいと思う。

男性同士の飲み会だと、育児については大変だという話にとどまり、何が足りなくて何をしなくてはいけないか具体的に話し合う機会があまりない。男性側としてはきちんとやっているつもりでも、女性側としてはやっていないと感じていて、妻と話してもそれを突きつけられると言い争いになってしまう。

だから、男性に対しても、自ら学ぶ、妻から指摘される以外に、第三者の視点でアドバイスをもらえるニュージーランドのような支援があれば子育てしやすくなる。

●石田部会長

結婚を希望していてもなかなか一步を踏み出せない若い方を、結婚に向けて動き出させるために必要な取組はないか意見を求められている。

○後藤委員

私たちが関わっている独身女性は、男性の収入は気にしていない。夫のステータスを自分のステータスにしようと考えている女性はほぼおらず、自分のことを伸ばしていきたいと思っている。ただし、例えば自分より料理が上手い男性など、家事・育児に関して協力的であることがニーズ。

だから、男性が結婚を希望している場合は、家事・育児スキルを上達させることが必要。私の娘の職場では、男性が早く帰って家事・育児をする人がいるそうだが、その理由は、自分（男性）のほうが体力があるから。とても納得できると言っている。家事・育児には女性のほうが向いているという決めつけをせずに、積極的にできる男性になることだと思う。

○石井委員

前提を確認したい。結婚を希望していても動き出せないというのは、交際している女性はいるが結婚まで踏み出せないということなのか。それとも、結婚はしたいが女性と出会う、交際することにためらいがあるということなのか。

□糯田次世代・女性活躍支援課長

いずれ結婚するつもりだが、その「いずれ」がだんだん遅くなっているという現状がある。その原因までは把握できていないが、早めに結婚できるチャンスをつかむようなことができないかが課題である。

●石田部会長

結婚したくてもできない人がどのくらいいるかとその理由については、まず調査

が必要ということか。

次に、目指す姿3について意見を伺いたい、まずは私から。

目指す姿2にも関係するが、仕事と家庭を両立している、両立したい女性が多いと思うし、若年女性が秋田に回帰するためにはそれがますます可能にならない。そのためには、高齢者、地域など家庭外の子育て支援コミュニティや仕組みづくりが必要で、今、おそらく秋田にはそのような民間支援はないと思うので、そこに意識を向けなければならない。

女性や若者が活躍できる社会の実現に向けて必要な取組について、意見はあるか。

○後藤委員

当法人でイベントを開催するとき、若い方が手伝いに来てくれるが、例えばコマ回しや輪投げなどの単純な遊びでも、自分の得意なこと、特技が生かされれば自分が必要とされていると感じられる。そのように、生活やお金のためにやっている仕事にプラスして、人から感謝されるような機会がないと人生はおもしろくないと思う。

●石田部会長

職場以外のサードプレイスというか、地域活動やNPO活動の中で、特技が生かされたり貢献できたりする場所が大事である。

○後藤委員

子どもは、やはりお兄ちゃん、お姉ちゃんが大好きなので、若い子が一緒に遊んでくれると喜ぶ。また、失業中でも子どもと遊んだり手伝いに来る若い子もいる。それを子育てとマッチングできればよいと思う。

○石井委員

女性の起業支援をしている石田部会長に質問したい。

私は、若者の起業支援をしていて、今、自分が大学生の頃と比べて若者にやさしい社会になったと感じている。いろいろな補助事業があつたり、やりたいと思えば周りが応援してくれたり、学生が活躍できる幅はこの10年間で改善した。

一方で、女性が活躍できる社会の実現を目指すということは、現状は活躍できない社会ということなのか。女性が活躍しようとすると、それを阻む社会的要因や構造が、いまだに秋田には残っていると感じるか。

●石田部会長

残っていると感じる。

秋田市だとあまり感じないが、ほかの市町村など地域社会では、慣習・文化に対して重い空気があり女性も非常に気にしている。企業でもアンコンシャスバイアスは根深いと思う。例えば、まだ女性の制服が残っている企業がある。秋田は寛容性が低い状況にあると思う。

このようにアンコンシャスバイアスは難しいテーマとしてあるが、一方で、女性活躍というのは、それよりむしろこの人口減少、人口オーナス期において、男性が長時間バリバリ働くだけではもう生産性が上がらなくて、女性も働いて労働生産性を高める仕組みにしなければならない。だから女性活躍を推進するというのが政府の根本。この「女性活躍」という言葉の目的を理解している人は少ないのではないかな。

この問題に関しては、コミュニケーションロスがあり、例えば子育て中の主婦は活躍していないのかと聞かれれば、それは活躍しているが、女性活躍政策には関係しない。また、経営者が、女性は活躍を望んでいないと認識していたり。

ただ、東京から来た私自身としては、そういう政策的なことだけではなく、単純にだれもが遠慮なく行動し、可能性を広げられるように支援していきたい。

○後藤委員

町内会長は男性でなければならないという地域がまだある。女性でもよいと思う。お茶を入れるのは女性。男性がお茶を入れて回ってもよい。秋田市内でもまだそういうところがある。

○石井委員

必要な取組としては、意識や価値観を変えていくことしかできないのかもしれない。

●石田部会長

普及・啓発が難しい状況にあるが、アンコンシャスバイアスにもう少し意識を向けて、イベントやセミナーの際に、これからどうすればよいか話し合うなど。

また、昨年度も意見を述べたが、女子高校生が自分のキャリアやWILLについて考えるワークショップなど、未来を担う女性たちに対しての教育があればよい。

次に、目指す姿4と5について、特に普及・啓発の方法に関する意見を伺いたい。

○後藤委員

こういうことに気をつければ脱炭素になるとか、食べ物を残さない、食べられる量だけ取るという一つ一つが脱炭素やSDGsにつながるということを、イベントなどにおいて実感してもらうのがよい。多様性に関しても、いろいろな人が集まっ

と一緒に何かをやると、例えばLGBTQの人も自分たちと変わらないという感覚を持てる。

理論を聞かされたり映像を見せられたりしても、自分の中に浸透しないと思う。

●石田部会長

経験する、体験する機会が必要である。

○後藤委員

LGBTQの人たちとお茶会をするなど。

SDGsには多様性だけでなく経済的なことや地球温暖化、脱炭素のことも含まれている。私も参加するから一緒にやりましょうという取組がよいと思う。

○石井委員

数年前はまだSDGsに取り組む企業が少なかったため、やっていれば頑張っている企業だと評価されていたが、今は当たり前になった。SDGsを推進していない企業は社会からマイナスの評価を受けるが、推進していても当たり前だからプラスの評価は受けられない。

企業の解釈次第でどんな取組でもSDGsと言えてしまうので、アワードの応募者を増やしても意味がない。それよりも、この取組はSDGsそのものといえる県内企業をとことん伸ばす支援をして、全国的に知名度を上げるほうが大事。

今回の部会の資料において、事業は記載されているが、これまで取り組んできたことの評価や結果と、事業の具体的な内容が分からないので意見しづらい。次回、これらが分かる資料があればよい。

●石田部会長

多様性とは、男女の違いやLGBTQだけではない。個人個人の価値観やどう生きたいかということは全員違っているという理解で推進すべき。10年後の姿として個性が尊重される姿を掲げていながら、出産・子育てしたくなるような教育を進めるのは、そのことと一貫性があるのか検討することは必要。

寛容性でもあるが、他人の生き方に共感はないが応援はする。この人とは考え方が違うと思っても口に出す必要はない。他人に迷惑をかけたり不快にしたりする生き方はもちろん応援できないが、それ以外は認められるはず。こういう基盤づくりをして、政策全体が多様性を尊重したものになっているかチェックするのが大事。

私は、心理的安全性が高く一人ひとりが生かされる環境づくりに取り組んでいるが、例えば職場では、その人の特性や思いが生かされるマネジメントはどうやったらできるかお伝えしている。子育てするかどうかもち、それぞれのWILLがあり、

それをお互いに認める。このマインドセットを秋田にどう作っていくかという視点があればよい。

○石井委員

県の事業には、意識を変える、理解を醸成するという、人の考え方、マインドセットに影響を及ぼそうとするセミナーや普及活動が多いが、やっても効果は薄い。やはり人は変わらない。

それよりも、全体的に、やはり社会構造をどう変えていくかということを考えた方がよい。例えば県民の健康増進が目的であれば、ウォーキングすると豪華な景品と交換できるポイントがたまるとか、無理矢理ではなく自然と意識が変わっていくようなサービスや仕組みを考えていくべき。

●石田部会長

施策としてどうしてもある方向に仕向けていく必要もあるかもしれないが、こんなチャンスやプラスアルファもあるとはっきり示したうえで、自由に選択してもらうほうがすっきりすると思う。

最後、目指す姿6について意見を伺いたい。

○後藤委員

行政手続の電子化率について、令和7年度目標が100%になっているが、業者や行政同士だけでなく高齢者を含めた一般の人もすべてデジタル手続きにするのか。

□長岐デジタル政策推進課長

目標を設定した時点では分析できなかったデジタル化にそぐわない部分もあるため、100%という目標達成は厳しいかもしれないが、現状としては、できるものはデジタル化していく姿勢でおり、9割、8割が限界かと考えている。

●石田部会長

県庁のWi-Fi環境の改善やコラボレーションツールの活用が推進されればよい。

それでは、予定時刻のため意見交換を終了する。

○事務局

事務局で今回の部会で出た意見の論点を整理し、次回に向けて引き続き委員の皆様と調整させていただきたい。

以上で、令和6年度総合政策審議会第1回未来創造・地域社会部会を閉会する。